「第１回　須坂市孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム推進協議会」における講演会の記録

演題：教育支援センターの活動と、就労支援事業との連携について
講師：学校教育課　子どもの居場所コーディネーター　三溝　清洋 氏
　　就労移行支援事業所ファシリカ長野　サービス管理責任者　戸谷　林太郎　氏

○ 事務局

それでは講演会に移ります。「教育支援センターの活動と、就労支援事業との連携について」、学校教育課　子どもの居場所コーディネーター　三溝清洋コーディネーターに講演をいただきます。本協議会で以前三溝コーディネーターが取り組まれていた中公亭の見学をしたこともございますが、あらためて三溝コーディネーターのご紹介をさせていただきます。三溝コーディネーターは、墨坂中学校の校長を最後に教員をご退職された後、2020 年４月に中央地域公民館の館長として就任されました。元々技術家庭科の先生でいらっしゃいまして、家庭や学校などに眠っていた机やいす、雑貨などを引き取って修繕、活用して、中公亭を立ち上げ、中公亭は子供から大人まで様々な世代の方の居場所となりました。現在は学校教育課子どもの居場所コーディネーターとして、子どもたちと取り組む居場所づくりや教育支援センターの活動などに取り組まれております。続きまして、就労移行支援事業所ファシリカ長野の外谷林太郎様です。ファシリカ長野では、障がいのある方が自分らしく働くためのサポートを行っておられ、三溝コーディネーターと連携して支援を行うこともあるということでございます。そして、もうおひとかた、須坂市社会福祉協議会助け合い起こし推進係　地域福祉コーディネーターの　祝井　一幸様でございます。それでは、講演のほうをよろしくお願いいたします。

○ 三溝コーディネーター

現在、私はコミュニティ支援室という活動に取り組んでおります。この場所は、以前中間教室と呼ばれて相森中学校の敷地内にあります。私たちの世代がちょうど通っていた頃には、学級数がとても多かったのですが、その後、相森中学校のプール裏に四つの教室が増設されました。しかし、少子化の影響もあり、子どもたちが減ってきたことで教室が空いてきました。そこで、学校に通いづらい子どもたちや学級に馴染めない子のための場として、私はそのスペースに「フレンドリールーム」と名前を付けました。現在、上高井地域では約 20 名ほどの児童がこの施設を利用しています。自己紹介でも触れましたが、私は退職後、公民館に足を運ぶようになりました。正直なところ、公民館という場はほとんど利用したことがなく、何もわからない状態でした。すると、常連の高齢者の方々の居場所として機能していることに気づきました。それはそれでとても大切なのですが、これからの社会では若い世代や子育て世帯も含めた多様な居場所が求められていくのではないかと感じています。長野県は全国でもっとも公民館数が多い地域です。ですから、それらの場所を活用しない手はないと考えています。今回の孤独・孤立の課題も含め、居場所を確保して開いていくことが不可欠です。そのような思いから、私はまず一番近い場所として、西側別館のガレージの開放に着手しました。ただ、公民館長としてはそれが本来の業務ではないため、周囲からは大きな反対意見もありました。皆さんご存知のとおり、あのガレージは各

課から出された廃材などを一時保管する倉庫として使われていました。そこで、皆で時間をかけて片付けを行いました。ただ予算を取ろうとすると制約が増えてしまい、自由な活動がしづらくなるため、お金をかけない居場所づくりを合言葉に、みんなの声がけによって 2〜3 年活動を続けました。そのうち施設の建物自体が解体される流れとなり、今の場所へと移りました。地域の活性化を図る中で、ガレージを片付けたのがきっかけとなり、「誰でも気軽に立ち寄れる場所が欲しい」、「アトリエやギャラリーにも活用したい」という声が集まりました。さらに、「防災拠点としてペットも飼える施設があると良い」、「温泉に入る機能を備えて自衛隊とも連携できるかもしれない」といった提案まで飛び出すようになりました。こうして、座って話せる場所、悩みを抱える高齢者が安心して訪れることができる場所など、世代を超えて交流できる場づくりが進んでいます。例えば、ある日近くの支援学校の子どもたちが散歩に訪れた際、たまたま置いていたドラムを見て叩き始めたのです。初めて楽器に触れて自己開示ができた瞬間でした。さらに、その空間の真ん中にある写真のイメージは、図書館長、高山議員、教育委員会の皆様など、多様な立場の方々が集まって映画会を開催した際の様子です。交流の場としての可能性が次々と形になっています。今後は、学校に通いづらく、特別な医療ケアを必要とする子どもたちにとっても安心できる場所を目指していきます。看護学を専門とする清泉大学の先生方とも連携を始めており、ももの木プロジェクトという取り組みが少しずつ動き始めています。「中公亭」という名前は勝手につけました。 この名前は、誰にも認知されているわけではありません。 過程として受け取っていただければと思います。 みんなが、なんとなく集まってきました。答えは出ていません。人が集まりました。 人がつながりました。それは「こと」の過程です。まとめはありません。総括もできていません。ただ、動いていたことを学びました。 問題はたくさんあります。それでも、自分たちで何かできる気がしてきました。根拠はありませんが、自信が生まれました。

何が進んでいるが、遅れているかなんてものはみなチャラです、ＡＩが出てきたから。子供も、ＡＩが先生です。 生きていること自体、このさっきマップもありましたよね、常に動的なんですよ。止まってはいない、常に動いている。みんなでそのコミュニティ独自の最適解を見つけるというのを僕自身が中公亭で学んだんです。だから、「たどり着く」ではありません。 このＳＤＧｓの理念を、誰もオフィシャルにしていません。環境など、そういったすべての課題は簡単ではありません。 もし目標に向かって簡単にクリアできる問題であれば、すでにクリアしています。しかし、そこに向かおうとする自分たちの動きがあります。その動きそのものが人生です。それが、どれくらい人に伝播していくかです。その右側は（スライドの写真）、この「中公亭サスティーン」、てふざけたように見えますが、これはＳＤＧｓのヒーローなんです。子供たちにいろんなこういう講演会の言葉が学校の授業でやっているけど、子供がそれ聞いてもわからないんです。ヒーローを作ったほうがいい。これは〇〇君という彼は、スーツアクターになりたいんだけどそれを隠しながら市役所に就職していました。じゃあそれを掘り起こして彼に。伊那か、中野か、興業に行きました。悪役４人とね。「プラスチッカー」っていうんです。そうするとＳＤＧｓ17 の目標のストーリーを一本化できるじゃないですか考えています。そうするとＳＤＧｓ17 の目標のストーリーを一本化できるじゃないですか考えてます。そうするとＳＤＧｓ17 の目標のストーリーを一本化できるじゃないですか考えてます。初め悪いって言っちゃったけど

悪役だって本当はいいやつなんだ。これだけはしっかりやれよって〇〇君にいった。良いも悪いも一緒なんだよっていうことで、絶対勧善懲悪にはしちゃいけないってストーリーにしました。最初に悪いやつが出てきて、悪いことをするわけです。 最終的にサスティーンが現れて、そいつをやっつけます。 やっつけられた相手は改心して、そこでバイバイとなるストーリーです。このパターンで 17 作も作りました。これについては後ほど改めてお話ししますが、４作か５作を作ったあたりで、私自身が病に倒れました。それでも、いくらでもこのパターンで作品を作ることはできました。

その後、教育支援センターというものができました。 さっき話したフレンドリールームは、その上の階にあります。教育支援センターという名前は、須坂市が決めたものです。 現在、教育支援センターには４つの部屋があり、施設全体でその機能を担っています。 その１階には、私たちが運営しているコミュニティ支援室があります。 この部屋は、コミュニティのつながりや対話を促進する場として設置しました。地域の人たちが気軽に訪れ、情報交換ができるようになっています。この支援室には、立場や所属がはっきりしていない方も含め、さまざまなコミュニティの方々がいらっしゃいます。 そうした多様性があるからこそ、誰でも気軽にアクセスできて、自然に会話が始まり、情報が共有されていくような環境になればいいと思いました。 そのような場をつくろうと話したとき、私は病院にいました。この大きな机についても、持っている姿を見てください。10 人の男性でもやっと運べるほど重くて、いらないと言っても捨てられないものです。それを運んできていただきました。右側にいるのは横山さんで、このときにチームとしてつながりました。みんなでお金をかけずに、何とか工夫してやりくりしています。 ただ、お金をかけないと人が集まります。つながりも生まれます。ここが面白いところです。ただ、それだけでは食べていけません。 その点については、ファシリカさんにお話しいただきたいと思います。まず、出生から保育、就学、そして就労まで、私たち昭和世代はこのように縦の流れで効率的に進んできました。 組織や行政も、少し前からその流れに対応しようとしてきました。しかし結局のところ、これは昭和の勢いがあった時代に作られた仕組みなのです。 その仕組みがうまく機能していたので、私自身もこれでいいと思っていました。この仕組みが、うまくいかなくなることがあります。 それは、私が大病を患ったからという理由だけではありません。 誰にでも、うまくいかなくなるときがあり、そのときにはこの仕組みが機能しなくなるのです。状況は複雑に絡み合っていきます。 特に問題となるのが、孤独や孤立です。先ほどの話は、一往にはつかみきれないものです。 これは、不登校の友達にも同じことが言えます。学校に行けない子を見て、先生との関係や家庭の問題だと言い出す人がいます。でも、それは違います。私の場合は、娘の出産がきっかけでした。 娘の出産です。一方で、私の世代は親の介護です。 私の両親は 95 歳で夫婦そろって動いています。これはもう、珍しいことです。 1 人であれば何とかなるのですが、90 歳を超えた２人となると、状況はまったく違ってきます。このとき、長男に双子が生まれました。 さらに、孫が同時に４人誕生したのです。その頃、私は無菌室に入り、点滴を受けていました。 つまり、入院費用も含めて、私は何もできない状態でした。 ベッドの上で、まったく動けない状態だったのです。この状態で抗がん治療を受けました。 すると、どうなるか。知識や理解もできなくなってうまく話すことができません。 声も出ず、筋肉もすべて落ちてしまいました。その中で、自分自身が大きく変わっていったのです。 もう、何が何だ

かわからないような状況でした。順調な縦割りの流れの中では、皆さん、これが孤独なのです。それは、誰でも孤独になりますよね。いろいろなことが起きて、どうしようもない状況になります。 これは、不登校の友達にも当てはまります。学校に行けなくなったとき、友達に嫌なことを言われたとか、病院にいっても原因がわからないなど、理由はさまざまです。 そして、すべてを閉ざしてしまい、引きこもるようになります。いわゆる子供部屋おじさんです。おそらく、国としてもこの問題は根底に大きくあるのだと思います。 高齢者の課題もありますが、どちらかといえば、社会とのつながりを持たない 30 代・40 代の人たちによる事件のほうが深刻です。また、社会とのつながりを築くのが苦手な子どもたちに対して、私たちがどれだけフォローできるか。 それによって、50 年後の社会がどうなるかが決まってくるのです。これ先ほどのプラットフォーム、それからマップについてもデジタルマーケティングです。これも一つの方法です。これは、真ん中に「コミュニティ支援」という仕組みがあります。 今、私がつくっているのは、まさにその部分です。 教育・福祉・医療は、やはり本人が表に出てこない限り、支援につながりにくいものです。一概に学校教育、つまり学校だけで対応するのは難しいのです。 実際、学校の中では不登校の子どもが１人、２人と確実に増えています。 本当だったら学校が面白くて何だろうな。だけど、その面白さって、それって 1 個に向かっていくときの面白さだったんですよ。 でも、今は価値観が多様化しているからこそ、別の意味で面白いのです。 その一方で、学校の先生たちはその多様さにどう対応すればよいか､困っているのが現状です。苦しいですし、何が何だかわからない状態です。

顔を見て、ここでフェイストゥフェイスで話をすることが大切なのです。 少しでも活動したいと思っている方が、だからこそここにいらっしゃいます。たくさんの顔を見ていると、自然と会話が生まれます。 出会った人同士がつながっていく。 それが、このネットワークかなっていうのが今のところなんです。最近では、創造の家の活用を検討しています。 〇〇さんが「辞めたらプライベートジムを作る」と話していたので、私たちはとても期待していました。でも､「創造の家」にはすでにジムの機械があるため、それを活用することにしました。この場所に今欠けているのは“運動系”の要素です。 学校に行きづらいけれど、ちょっとスポーツしたいなという子たちがつながれる場が必要だと気づきました。そうした背景から、〇〇さんにも仲間として加わっていただきました。動物が好きな子もいるかもしれないので、アニマルセラピーも。 そうして活動が少しずつ増えてきました。コトコトの井上さんのエールやペチャクチャさん、アップサイクル楽蔵や地域食堂などの取り組みもあります。これらをコミュニティ支援室の中でつなげていき、 子どもたちをどのようにサポートできるかというネットワークができています。今ここにいる皆さん一人ひとりが、そのネットワークの中心にいます。 それぞれが大きなつながりを持っていて、 そのつながりが広がれば、一歩でも二歩でも前に進んでいきます。コミュニティ支援室には様々なことで生徒が来ているんですけどもね。自分の居場所を自分で創造できる時間、これは学校のカリキュラムにはないものです。こんなことはＡＩに任せればいい。でも自分が直面したときに自分の居場所ってどうですか。皆さんも自分で自分たちの居場所を確保しようとするじゃないですか。そこから学習がはじまる。このお手伝いができればいいなというふうにやって、そんな力がつけばいいなってコミュニティ支援室の１階で活動しています。

ここからが大切なところです。 そのときに、私たちはこうして人と人をつないでいきます。

しかし、その先の“受け皿”がないのです。そこを開発しなければ、将来はどうなるかわかりません。 そこで、私たちの受け皿となるような事業を行っているのが、 ここにいる戸谷林太郎代表です。彼はその取り組みをさらに広げていこうとしています。「なるほど、こういう手順があるのではないか」と考えながら、障害者手帳の有無に関係なく、誰もが関われる方向へ広げていこうとしています。また、課題も持っていらっしゃるので、今日はその思いを共有していただきたくて、ここにお呼びしました。具体的な彼のやり方って、このケースだったらこの人だっていう意見。ここのところが民間と官民連携という一つの方法形になっています。アップするような人たち、若い人たちがピックアップし、何か考えてよしこれやりたいってときに俺たちはサポートして助走させる、グライダーの牽引をするする。それができるのか僕は行政だと思う。民間だと一発挑戦して失敗すると駄目だけど、その点では自分たちは保証されていると思います。それを使わない手はない。だったらその引っ張るところまでやろう。そう考えて今回戸谷林太郎代表をお招きしたんです。

○ファリシカ長野　外谷林太郎　サービス管理責任者

まだ僕代表じゃなくて雇われサラリーマンです。長野市の就労移行支援事業所ファシリカ長野でサービス管理責任者をしています。須坂市と縁がなさそうと思われる方もいると思うが、自分は三溝先生の教え子。30 年ぶりに信毎記者の友達がきっかけで会いに行きました。それがきっかけで今日お話をさせてもらっています。この会の趣旨をよく理解してないかもしれないのですがどうぞよろしくお願いします。

ファシリカ長野で就労移行の支援事業というのをやっていって、障害のある方のサポートをしています。最近では、障害者手帳を持っていない方や、医療機関にも通っていない方が増えています。10 年ほど前までは、障害者雇用＝手帳を持っている方が対象というイメージが強かったのですが、今は状況が大きく変わってきています。実際に、家に引きこもっていて医療ともつながっていないけれど、社会性に課題を抱えていて、どうしたらいいのかと悩んでいるお母さんたちからの相談を受けることが増えています私個人としては、会った人はその瞬間から全員サポートしたいという気持ちがあります。もちろん、それは現実的にはすべてを叶えることはできません。ですが、理想に少しでも近づけるために、スキルを身につけたり、経験を積んだり、住まいの支援を行ったりと、できることを一つひとつ積み重ねています。今日は孤立・孤独というテーマを考える時間として、少し勝手ながら、この業務を官民で連携して取り組んだら、どんないいことができるのだろうかと想像しながらお話をさせていただきます。須坂市の取り組みで、マップを作成しているという話を聞いて、私もこれは必要だなと感じました。実際に使ってみたいと思いましたし、うちの事業所でもそういったツールを活用しています。マップを掲示することで、みんなの興味や関心を引くことができるので、実際に貼って使っています。私が今日一番伝えたいのは、ここに書いてある今ある社会資源を活用して問題解決を図るということです。限られた資源の中でも、工夫次第でできることはたくさんある。だからこそ、今あるものをどう活かすかが大切だと思っています。三溝先生も地域の課題は地域で解決するのが最適解とおっしゃっていましたが、まさにその通りだと思います。この地域には、困っている人がいて、それを何とか助けようとしている人もすでに存在しています。つまり、社会の中にはすでに答えとなるも

のがあるのに、それがまだ答えとして認識されていなかったり、知られていないだけということが、実はたくさんあるのではないかと感じています。新しいものを作っていくことってすごく大事なんですけれども、今あるものをいっぱい見直したりとか、もっと上手に使ってみようよっていうところから始められるものっていうのは初動が短いですし、お金もかからない。結構いいかなって思っています。 厚生労働省や内閣府の「孤立・孤独対策推進法」の中にもいろんなアイディアがありますけど、実際に読んでみると、須坂の中とか長野の中にも結構あるなと思いました。 やっぱり、国がこれからやろうとしていることって、実はもう地域で取り組まれているものがあって、それをもっともっと活用していくのがいいんじゃないかなと思います。独断と思い込みなんですけど、孤独や孤立しちゃったりとか、一番は僕は地域住民が社会資源を知らないことなのかなって思っています。失礼な言い方かもしれませんが、うちのファシリカ長野という事業所は、長野県内にある就労移行支援の競合が約 20 社ある中で、開設からわずか 10 か月で利用者数が一番になりました。 しかも、２番手の事業所の倍の人数です。なぜそういう結果になったかというと、サービスの質が特別高かったわけでもなく、支援の実績が豊富だったわけでもありません。単純に、うちの事業所のことを知ってくれていたという結果なんです。既存の福祉事業では、プランナーさんや相談支援事業所などからの紹介を通じて、支援が始まるのが一般的です。 でも、私たちにはそういった実績がありませんでした。長野市内の約 400 店舗にチラシを置かせてもらっています。だいたい 2,000 枚配ると、1 件反響があります。 可能性としては 0.1%ぐらいなんです。最初は確率はそんなに高くないけどとにかく母数を多くする。自分たちからしっかり出いって説明をすることっていうのをしたら、今は 85%の人はファシリカしか知らないって言われるんですね。

「うちでサポートを受けたい」と言ってもらえるのは、本当にありがたいことです。でも、社会全体で見れば、他の就労移行支援の選択肢も知ったうえで、「他も少し見てみようかな」と思えるような、そんな風通しの良い世の中になってほしいと感じています。実際には、そういう選択ができる人ばかりではありません。支援にたどり着けていない方も多くて、「もったいないな」と感じることがよくあります。特に、困っている人ほど「相談する」という行動が取りづらい傾向があります。 それは、成功体験が少なくなってしまって、自分の意思決定に自信が持てなくなってしまうから。 「自分の考え方で動いても、うまくいかないかもしれない」と思ってしまうと、誰かに相談することすらハードルになってしまうんです。私のことですが、２年前に子どもが不登校になり、会社を６ヶ月ほど休んで子どもと一緒に過ごしました。 私も仕事を入れていなかったので、「仕事してないけど子どもはいる」という状況に、普通と違うような感覚を持ってしまいました。世間体を気にしていた部分もあったかもしれません。そのせいで、自分の行動が少し制限されてしまったような、自由がなくなったような感覚がありました。もしかしたら、同じような人もいるかもしれないし、人と会わないでいると、そういう気持ちになっていくこともあると思います。これは、僕の等身大のエピソードです。３点目が社会資源の担い手がちょっと不足しちゃっているよというところです。よく支援事業所の方から「人いっぱい集まりましたね」と言われることがあるんですけど、 いや、うちはただ単純に使ってほしいと思っているから、伝える努力をしているだけなんですって話をしています。 そういうことをしていると、「そんな時間ないですよ」ってよく言われます。三溝先生もされていましたけど、ＡＩの力を借りて

記録物はまとめてしまうとか、 人と人で一緒にいる時間をちゃんと確保しつつ、他の利用者さんに向けて周知していく時間もちゃんと取らなきゃいけないと思っています。けれども、他の事業所さんではなかなかそこまで手が回っていないところもあります。でも、福祉に関わっている人たちはみんな優しくて親切で、来てくれた方の願いを全部叶えたいと思っているから、すごく丁寧なんですよね。だから、時間があればあるだけ、みなさんすごく利用者さんのサポートに力を入れていて、結果的に周りのことを見ないまま終わってしまうこともあるのかなと感じています。こういった現状をあえて聞く形に持っていくとき、課題解決のステップって何だろうと考えたときに、僕の中では「周知すること」がキーワードになると思っています。地域の資源を知らない人には、まず周知すること。相談できない人には、ここが窓口なんだよと伝えて、気軽に話してみようと思えるようにすること。そういう働きかけが、すごく大事だと思っています。

移動支援は６人で担当しています。現在、外部のワーカーの方にもご協力いただいており、約４人の方が加わってくださっています。雇用契約で従業員が支援を行っているだけでなく、地域の人材も活用しています。あと、プレ実習と呼んでいる取り組みがあり、競合を前提としない就業経験ができる方向性で、市内に 20 ヶ所あります。そういう取り組みがあることで、私たち以外にも、例えばラーメン屋さんが少し仕事を教えてくれたり、経験をさせてくれることがあります。社会の資源を上手に活用できるようになることで、担い手不足の分野に対して、こうしたアイディアを周知したり、参加を促していくことが必要だと思っています。

私が考えた実施案は二つあります。ひとつは「つながりサポーター」という名前をつけました。私は福祉の担い手ではありますが、高齢者のことや地域移行支援についてはあまり詳しくありません。そのため、必要に応じて病院の地域連携室の方に話を聞いて、勉強させてもらっています。相談を受けたときに、自分の持っている知識や経験だけで解決しようとしてしまうところがあります。だから、横の連携や横の情報があるといいなと思っていて、そのために研修会や座談会などを行っています。移行の事業所なので、仕事や就労系の相談ができる同業の人が集まる団体のような感じですけど、福祉の関係者やボランティアの人、高齢で少し寂しさを感じている人など、誰でもいいんです。さっきの中公亭さんのような場所があるような催しがもっと増えれば、事業やサービスの枠を超えたつながりができていくと思います。

僕は認可を受けて役割を担っている立場なので、その役割を果たしながらプラスアルファのこともやっています。ただ、プラスアルファの部分を実際にやってくれる人がいるのであれば、その人にきちんと渡した方が、社会としても豊かになるのかなと思っています。だから、横のつながりのネットワークやコミュニケーションをとるようにしています。もうすでにネットワークの仕組みはあるので、その中で潤滑に動いたり、さっきの三溝先生みたいに気持ちでどんどん進んでいくような人がいると、意外と結果が後からついてきたりします。そういう人と一緒にやっているとちょっと楽しい。ひとりひとり、人間感情持っていて馬があうとかあると思っていて、そういう人が繋がり、サポーターの研修や座談会を通じて「俺やってもいいんだな」みたいなふうに思ってもらえるようになったら、ちょっと面白いかなと思って います。民間業者さんにも協力を依頼してはどうかと思っています。ちょっとお金がかかる話なんですけど、チラシを作ってもらって発行し、地域の住民自治込み協議会さんと連携して、地域紙の中に折り込んでもらっう。そういうことができたら、引きこもっている人にも届くかなと思います。

今、ＳＮＳがすごく発達してきてるんですけど、情報の発信元がわからないものに対してＳＯＳを出すのは、やっぱりすごくリスクがあることだと思います。私としても、そういうところはちょっと続かない部分があるかなと思っています。 なので、公的な媒体からの発信物っていうのは、すごく効果的なんじゃないかなと思っています。地域で何か資料を発行することがあれば、そこに１行でも書いてもらったり、料理のチラシを１枚作ってもらったりするだけでも、十分意味があると思います。あとは、テレビ局とか新聞社さんに取材の依頼を入れていくといいと思っています。本当に、お世辞抜きで、地域が活性化するときには行政さんが旗振り役というか、先導してくれることがすごく大事だなと思っていて、行政さんの方で依頼文書を作って、事前にアポイントを取って新聞社さんに行ったりすると、ちゃんとお金はかからないけど、しっかり取材してくれたりします。今まで長野県とか群馬県、新潟県などで、障害者啓発事業の企画を指定運営していたことがあるんですけど、この依頼文書って、なんか水戸黄門のあれみたいな感じなんですよね。これで協力してくださいってお願いすると、ちゃんと依頼に応えてくれたりするんです。でもそれは、民間の私が依頼文書を作ってやったとしても、なかなかそういうふうにはいかないことなので、本当に行政さんにしかできないことだと思っています。 民間事業者さんは、もうＫＰＩで「何ヶ月に一度チラシをまいてください」、「こういうことをやってください」っていうふうに、仕様書で企画を決めると、必ずそれはやってくれます。その役割分担として、これはきっちりやりますよってコミットしてくれているので、そういう仕組みを活かして連携できたら、面白いのかなと思っています。

官民連携した今回のプラットフォームみたいなものを、ひとつ広げていくっていう意味合いも少しあるんですけど、「つながりサポーター」の取り組み事例を発信していくことも考えています。たとえば、今日はつながりサポーターの私が、こういうところにこういう支援をしてきましたみたいな、そういう記事やレポートのようなものです。 そういうのは、福祉部の学生さんとか、新聞社さんや広告会社に就職したいと思っている人にもいいと思います。就職活動の前に、「大学時代に何かサークル活動とかやっていましたか」って、けっこう聞かれることもあるので、そういう取り組みに関わっていると、就活のときにも話せることが増えると思います。そういったときのユニークなエピソードとしても使えると思いますし、特に福祉系の学生さんって、福祉のことにすごく興味があるから、こういう活動も伸ばしていければ、実はやってくれるんじゃないかなって感じています。この前聞いたら、社協のボランティア登録の人はいっぱいいるって聞いたので、そういう人にも少し声をかけて、自分たちでできる中で、できる範囲で周知していこうよっていうことで、協力してもらうのもけっこういいかなって思っています。ここはお金がかからない、というか、ボランティアの方による活動にはなるんですけど、その活動自体にも豊かさがあると思うので、「こういうことで協力してくれる人いませんか」って周知していくのも、けっこう面白いんじゃないかなって思っています。そうやって周知をして登場人物を少しずつ増やしていくことで、いろんな連携の仕方やバリエーションも広がってきて、その中で相乗効果も生まれてくるんじゃないかなって感じています。 ユーザー数を増やすことと、そこでの機能を充実させていくことが、やっぱり一番大きなポイントだと思います。そのためにはまず知ってもらうことが大事で、そこからユーザーとして参加してくれる人や、推進役として関わってくれる人など、いろんな立場の人を少しずつ増やしていくところから始められたら面白いんじゃな

いかなと思って、ちょっとお話させていただきました。
　初めて来たのに、いろいろと話してしまって恐れ多い部分もあるんですけど、もし何か使えそうなアイディアだなと思っていただけたら、私もぜひ協力させていただきたいと思います。

〇三溝コーディネーター
　孤独・孤立は、あらゆる世代の人に起こります。 育児期にも孤独・孤立は見られます。特に保育園に通う前の時期は、外との接点が少なく、育児を一人で担うことで孤立しやすくなります。現在の大きな「問い」なんです、これは。ＳＤＧｓの誰も置き去りにしないと同じように、簡単に超えられないんです。令和の学校教育の根幹は、主体的・対話的で深い学びです。そもそもなかったんですよ。「答え」なんて言うものはないんです。課題が起きて、解決したように見えたとしても、形が変わるだけで、本質は変わっていないんです。これは今、自分で考えたことです。何かを喋ったりして気分を変えようとしても、「なるほど、何かが必要だ」と思うだけで、根本は変わらないんです。 だから、一度起きてしまった問題は、絶対に解決しないんです。これは昔、村上春樹がどこかの本の中で書いています。だからと言っているのは一人ずつ違うんです。哲学的ですよ、これは。自分事だからこそ、良いテーマだと思う。 それぞれの立場や人生の中で、「孤独・孤立って何だろう」「今日、孤独だな」と考えることがある。そういう瞬間に向き合うことが、今の社会にとって大事な問いになっています。私今、寛解なんですよ。お医者さんは検査結果をう～ん、なるほどと一緒に悩んでくれる。でも治ったわけとは違う、寛解。このプラットフォームの皆さんが孤独孤立について考えてくれている。 その姿を見た人が救われることがあります。これ学校に行けない、センターの２階に来ている友達も同じ。大人たちが考えてくれた、悩んでくれた。別に人間関係を良くしたわけでも友達との喧嘩を無くしたのでもない。でも、元に戻っていった子もいます。「考えて動く」っていう、それが答えなんですよ。 答えは静的にあるわけじゃなくて、動的に動いている。これが答え。動くことが答えなんです。動くことが、すでに答えだと思う。たどり着かなくても、結果を出さなくても、上に行かなくてもいい。今までつながっていなかった人と、人としてつながって、みんなで考えて、自分にできることを実践していきたいと思っています。で、ひとりでバババーンって行くと俺みたいになっちゃいますよ、これはだめ。これＳＤＧｓでも時々言われたことです、一人の百歩より、皆さんこれだけいるんだから一歩ずつできると思う。でも無理しちゃダメ。で、民間に頼る。これだと思いますが、ぜひ一緒に今後も考えたいと思います。最後に今日のために深夜まで準備をしてくれた若者、戸谷さんに拍手をお願いします。

〇　事務局
　質疑・意見を委員に求めた。

〇　委員
　本協議会には最初から出させていただいています。本日は要綱改正をして、新しい委員さんにも入っていただき本当によかったと思います。そして今日は本当に素晴らしいお話でしたので、聞いてもらえる人を協議会以外にも拡大していってもらえるとよいと思いました。

○　事務局

はい、ありがとうございます。昨年度も２回目の協議会では公開としましたので、そのあたりを含めて事務局で検討してまいります。